

1960年代～テレビとアングラ

この講義で使ったスライドやレジュメは<http://www.djmagimix.org>で閲覧が可能です。
遅刻注意：出席票の配布は授業開始から30分で停止します。
雑音注意：教室後方で私語が多いです。おしゃべりしたい人は即時退席すること。逆に私語が五月蝿くて困るという人は、前方の席に座るくらいの積極性を持つこと。

中間的まとめ

メディア利用の変化（別紙グラフ参照）

- ・日仏に共通する傾向
 - ・1930年代を通し、レコード（SP盤）生産は下落し、ラジオ受信数（世帯数）が急伸
 - ・戦時中は押し並べて娯楽メディアは落ち込む
 - ・戦後はテレビ放送の普及が急速に広がる（ただし、普及速度は日本の方が速め）

いくつかのキーワード

媒介

メディア技術による媒介

- ・印刷技術
- ・オルゴール・自動ピアノ
- ・アコースティック録音技術
- ・電気録音技術
- ・映画技術
- ・放送・通信技術

都市空間による媒介

- ・近代的権力と悪場所
- ・交通機関

音楽産業による媒介

- ・大量生産
- ・規格化とえせ個性
- ・複製芸術と大衆の隆盛
- ・アウラの消滅
- ・市場の世界規模化
- ・アメリカ資本の台頭

社会関係による媒介

- ・貧富の差
- ・人種差別
- ・性差別

法制度による媒介

- ・著作権
- ・風俗営業法

音楽と雑音

4つのレゾー（ジャック・アタリ）

☞ジャック・アタリ（2003）『音楽・貨幣・雑音』みすず書房

- ・19世紀末から20世紀の最初の30年：演奏のレゾー（生演奏）から反復のレゾー（録音）への移行期

秩序と反・秩序

- ・ポピュラー音楽は、時に主流社会の価値観（つまり《音楽》）を覆す反・秩序的な価値観・ダイナミズム（つまり《雑音》）を内包する
- ・政治的メッセージソングとしての壮士演歌やモンマルトルの毒舌シャンソン

●メディア技術の変化により、ミュージシャンとリスナーの関係は変化し、録音によって提供出来る音楽のかたちや親密さも変わった
 ●メディア技術は時に支配階級により秩序維持に利用され、逸脱者の排除と臣民の統制に利用された
 ●しかし大衆は、多くの場合、これらの技術を《流用》して、自分たちの音楽や文化を作り上げた
 ●その中で、大衆の音楽はメディア空間のなかに取り込まれていった
 ●工業化が進み、労働者の都市流入が進むと、権力は、秩序維持のために都市空間を整備する。
 ●しかし都市空間はポピュラー音楽が作られ、聴かれる舞台装置となった。
 ●テオドール・アドルノの文化産業批判と、ヴァルター・ベンヤミンの複製技術賞賛の対比。この矛盾する視点の相克（商売と芸術、大衆とエリート、……）は今日に至るまで結論が出ずに継続。
 ●一方、娯楽産業への米資本の進出は、1920年代の電気録音とトーキー映画の普及で既に顕著化していた。
 ●都市の近代化は、富裕層と貧困層を露骨に隔離し、それぞれが好む音楽を聴く場所をも分断した
 ●ジャズなど、アメリカの黒人音楽は、白人によって演奏・商品化され、世界に紹介された。そもそも、黒人の好む黒人音楽の録音は始まったのは、ラジオ放送によって蓄音機が流行遅れになってからであった
 ●これまで見て来たポピュラー音楽の展開の大部分は男性主体であり、女性は男性の求めるステレオタイプに沿った演技を強いられて来た
 ●ポピュラー音楽の進展は、著作権法のあり方と密接な関係を持ち続けた
 ●支配階級は、つねに大衆の身体を管理しようとし、場合によっては法律などの規則を通して、自分たちに都合の良い《道徳》から外れる人々を《逸脱者（アウトサイダー）》として取り締まった

- ・それまでの歌唱法ではあり得ない親密さとエロティシズムが物議を醸し出したクルーニング唱法
- ・群衆の身体的快楽を解き放ったジャズ

「音楽」に取り込まれる雑音

- ・しかし、これまでのところ（1940年代末時点）、ほとんどのポピュラー音楽は秩序（レコードによる蓄積と反復）側に取り込まれてしまい、新しいレゾーの誕生には至っていない
- ・いつの間にか、ミュージシャンにとってレコード会社との契約にサインすることが究極の目的となる
 - ・《アーティスト》たちは、自ら《モノ》として商品化されるよう動機付けている

文化

高尚文化と低級文化（教科書p.42）

- エリート文化：美的教養の水準に関連。欧州の「高尚」文化のたしなみを通して獲得されるもの
- 芸術や学習のみでなく、制度や普段の振舞いのなかで特定の意味や価値を表現する特定の生き方
 - ・レイモンド・ウィリアムス（2002）『完訳キーワード辞典』平凡社の《文化》の項参照

文化人類学的定義

- ・「文化というものは基本的には一群の人々が共通の問題に直面し、しかも互いに効果的に相互行為とコミュニケーションを行っている限り、その共通問題に照応して生ずる」
- ・ハワード・ベッカー（1993）『新装版アウトサイダーズ～ラベリング理論とはなにか』新泉社p.117

複数の文化の対立と序列

- ・しかし、実際の社会空間では、これら複数の文化がただ並立しているのではなく、その《正しさ（特に学校教育で教えられる文化的素養への近さ）》や《洗練の度合い》、《知識獲得の難易度》、《知識の稀少性》などにより序列がつけられている
- ・ある文化は、他の文化との関係性のなかで位置付けられており、序列のなかでより高い位置の獲得を指向して対立・競合している（→「卓越化」）

音響世界の拡張

ミュージシャンとリスナーの関係

- ・様々な種類の媒介があり、ミュージシャンとリスナーが直接的に（無媒介で）結びつくことは出来ない
- ・出来ないにも拘らず、ミュージシャンとリスナーは、音楽を通して直接結びつきたいと望んでおり、また結びついていると考えている（→この辺本気の人が多いので、イジりにくい：笑）

技術圏と3つの録音形式

- ・ドキュメンタリー型：録音技術が介在していることを隠そうとする（ホール録音、原音忠実性（ハイファイ）技術の進展…）
- ・腹話術型：身体延長として楽器や技術を利用する（クルーニング唱法、スキヤット、歪んだ電気ギター、スクラッチ…）
- ・仮想音響環境型：音の発生源そのものが存在しないような仮想次元の構築（テープ編集、多重録音、プレイクビート、サンプリング…）

50～60年代の音楽メディアとその社会化

マイクログループ技術

- ・長時間レコードの可能性（Long Play=LP盤。33回転・1948年に米コロムビア社が最初に発売）
 - ・音楽的表現の解放
 - ・クラシック：交響曲が一枚のレコードに収録可能
 - ・ジャズ：近代化・芸術化（モダンジャズの興隆と即興演奏の長時間化）

- ・シングル盤（Extended Play＝EP盤。45回転・1949年に米RCAビクター社が最初に発売）
 - ・ティーン向けヒット曲市場の隆盛
 - ・レコード制作・製造の廉価化 ⇔ ベビーブームと若者市場の巨大化

ステレオ技術

- ・複数の規格が競合
 - ・バイノーラル方式、45-45方式、VL方式
- ・原音忠実性の更なる追求
 - ・クラシック音楽におけるドキュメンタリー型技法の全面化
 - ・後のサラウンドシステムにつながるような実験（マニアは音楽だけでなく環境音等も聴き込む）

磁気テープ技術

- ・30年代末ドイツで実用化。ナチスのプロパガンダに使用される。
 - ・アメリカ兵が瓦礫のなかからナチスのテープ機材を発見し、持ち帰り、1947年に3Mが発売開始
- ・LPの登場による録音時間の長時間化に対応し、「録り直し」のきく録音メディアとして不可欠に
 - ・レコード制作コストの引き下げに貢献
- ・多重録音
 - ・演奏を楽器パートごとに別々に録音して、あたかも同時に演奏しているかのように重ねあわせる
 - ・レス・ポール（1948）「ブラジル」Capitol
 - ・同じ曲を複数テイク録音し、それらを重ねあわせる（オーヴァーダビング）
 - ・ザ・ロネッツ（1963）「ビー・マイ・ベイビー」Phillies Records（prod.フィル・スペクター）
 - ・スプライシング（磁気テープを適当な箇所切断し、切り取った断片をテープで貼りあわせる）
 - ・ビーチボーイズ（1966）「グッド・ヴァイブレーション」Capitol
 - ・逆回転（正方向で録音した磁気テープを逆方向で再生する）
 - ・ジミ・ヘンドリクス・エクスペリエンス（1967）「アー・ユー・エクスペリエンスト？」Track Records
- ・あわせ技
 - ・ビートルズ（1967）「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」EMI

携帯型レコードプレイヤー

- ・50年代以降、若者向けの廉価モデルが発売される
 - ・若者たちが若者たちのための音楽を聴き、踊るようになる
 - ・回転数のセクターがないモデルも多かった
 - ・女子向けのデザイン、色遣いのモデルも

トランジスタラジオ

- ・1954年、米リージェンシー社が初めて市販化
 - ・聴取経験の個人化
 - ・車、という聴取空間

テレビ放送

- ・1941年にアメリカで本格放送開始。1954年にはカラー放送も
 - ・ラジオに変わってお茶の間の主役に→「エド・サリヴァン・ショー」（1948年から1971年まで）

ロック前史（アメリカの文脈）

リズム&ブルース（R'n'B）

- ・人種（レイス）ミュージックの新しい呼び名として40年代末にレコード産業が使いだしたマーケティング用語
- ・60年代以降、ロックンロール（下記参照）という呼び名が主流になると、エレクトリックブルース、ゴスペル、ソウル、ファンクなど《ロックンロール以外の》黒人音楽を指す総称となる
- ・典型的な楽器構成：ドラムス、ウッドベース（ピチカート）、サクソ、プラス、ピアノ、オルガン、エレキギター、ヴォーカル、バックコーラス

☞ネルソン・ジョージ（1990）『リズム&ブルースの死』早川書房

ロックンロール（Rock 'n' Roll）

- ・元々はリズム&ブルースとほぼ同じ意味。白人向けにリズム&ブルースを紹介する際に、黒人イメージを《脱色》する狙いで作られた呼び名とされる。元々は性交を意味する黒人のスラングであり、リズム&ブルースには30年代後半からロックンロールとかロックンローリンという言葉タイトルに使った曲があった
- ・1951年、アメリカ北部のラジオ局の白人DJ、アラン・フリード（a.k.a.ムンドッグ）が自分の番組名を「レコード・ランデヴー」から「ムンドッグズ・ロックンロール・パーティー」に変更し、白人リスナー向けにロックンロールという呼び名でリズム&ブルース曲を紹介した
- ・典型的な楽器編成：電気ギター、ウッド／電気ベース、ドラムス、ピアノ、サクソ（次第に衰退）
- ・シングル盤として作品をリリース（→《教養》のない、労働者階級の若者向け）

ロカビリー

- ・1950年代。ロックンロールの初期形態。アメリカ南部で、白人のカントリーの流れ（ヒルビリー）に黒人のブルース、ゴスペル、リズム&ブルースなどの要素が融合して登場。60年代には低迷
- ・典型的な楽器編成：ギター、ウッドベース（スラップ）、ドラムス、ピアノ

ブリル・ビルディング・サウンド

- ・《スターシステム》が、ロックンロールやティーンアイドルにも手を伸ばしだす（彼らの発売元の事務所が集まったNYブロードウェイの高層ビルの名前から「ブリル・ビルディング・サウンド」と呼ばれた）
- ・ロックンロールの楽器構成に加え、甘いストリングスやホーンセクションを多用
 - ・作曲家／作詞家、プロデューサー、演奏家（歌手）の分業体制→キャロル・キング、フィル・スペクター

サーフ・ミュージック（アメリカ）

- ・「ブリル・ビルディング・サウンド」に対する反抗心から、エレキギターをメインにしたシンプルなサウンドへの回帰を狙う
 - ・ヴェンチャーズ（1958年結成） → ビーチボーイズ（1961年結成）

モダン・フォーク（フォーク・リヴァイヴァル）

- ・1950年代、プロの作曲家による作品ではなく、民衆の間に昔から親しまれて来た民謡（フォークソング）を見直し、演奏するミュージシャンが台頭
 - ・次第に、新種差別や反戦を取り上げたオリジナル曲（プロテストソング）を歌うようになる
 - ・→シンガー・ソングライター＝自作自演に価値観を置く
- ・典型的な楽器編成：アコースティックギター、バンジョー（不自然な技術圏への接続を嫌悪する）
- ・LPレコードによるアルバムとして作品をリリース（→《教養》のある、インテリ層向け）

ロックンロールからロックへ

マーギー・ビート（イギリス）とブリティッシュ・インヴェージョン

- ・ロックンロールはレコードを介してイギリスにも影響を与え、リヴァプールなどの港町を中心に、人気グループが誕生（→ビートルズ、アニマルズ、ローリング・ストーンズ、ヤードバーズ……）
- ・1964年1月、ビートルズの「抱きしめたい（原題I Want to Hold Your Hand）」が米ビルボード1位
 - ・低迷していたアメリカのロックンロール／ロカビリー市場を刺激
- ・1964年2月、初訪米、初コンサート
 - ・エド・サリヴァン・ショーは視聴率40%（！）

フォークロック

- ・自作曲を歌い始めたモダン・フォークの若手ミュージシャンの一部が、ブリティッシュ・インヴェージョンの影響を受け、ロックンロールを取り入れる
 - ・ボブ・ディラン（1965）「サブタレニアン・ホームシック・ブルース」Columbia
 - ・モダン・フォークのファンからの強い批判
 - ・ロックンロールにシンガーソングライターたちの政治性、メッセージ性が流入
 - ・秩序・権威への抗議、マイノリティへの共感・共闘、反体制……

この頃（1965）から、「ロック」という言葉が使われ始める

- ・次回までに教科書第5章を読んでくること